

報告 2

奈文研による発掘調査

奈良文化財研究所 都城発掘調査部 神野 恵

ご紹介ありがとうございました。都城発掘調査部^{じんの めぐみ}の神野恵です。

今日は奈文研の発掘調査、長い歴史がありますが、要領よくまとめて話をさせていただこうと思います。

はじめに一奈文研以前の発掘

先ほど内田部長や佐藤先生からのお話にもありましたように、地元住民や有識者などさまざまな方々のご尽力によりまして、重要な史跡として保存が決まった平城宮跡ですが、田んぼや畑として農民の方々が土地を触るうちに遺物を見つけてしまった、あるいは整備のために溝を切ったときに遺構を見つけてしまったなんていうことがあったようでございます。

戦前の昭和2年（1927）には、通称^{いちじょうどお}一条通り（県道 104 号^{たにだなら}谷田奈良線）と呼ばれている道路の北側で基幹排水路^{きかんはいすいろう}と呼ぶ大溝の一部らしき玉石が農民の方々によって掘り出されるといったことがありました。これは大変だということで、その翌年には奈良県の技師だった岸熊吉^{きしくまきち}さんを招いて、発掘調査が行われました。この写真（図1）は調査にもご参加された溝辺^{たまいし}さんのご子孫に伝わっていたものです。写っている方の服装を見ると、よく当時の様子がわかりますよね。戦前にもこういった単発的な発掘調査がありました。



図1 昭和初めの発掘（溝辺文昭氏所蔵、奈文研 2022 年）

日本が終戦を迎えると、平城宮内の北東部、現在、航空自衛隊の幹部学校がありますが、ここがGHQに接収されまして、米軍基地が置かれました。基地周辺には戦車のような大きな車が通るための道路が必要だということで、現在の一条通りが整備されることになったわけです。

それ以前の一条通りは、^{りどう}里道のような蛇行する小さな道路でしたが（図2）、それを大型車両が通行できる直



図2 昭和20年代後半の一条通り（入江泰吉撮影 入江泰吉記念奈良市写真美術館所蔵、奈文研2022年）

線道路に整備をする計画が立てられました。この工事に先立って昭和29年（1954）に平城宮跡遺跡調査会が組織され、どのような遺構があるのか確認するための発掘調査がおこなわれました。そのときの調査で大規模な建物跡が見つかって、これは継続的かつ本格的な発掘調査が必要だということになったのです。翌年の昭和30年（1955）には、奈良県教育委員会の協力の下で奈文研による第1次発掘調査が行われることになりました。

さきほど佐藤先生のお話でもありましたが、佐藤先生が若かりし頃に研鑽^{けんさん}を積まれたという奈文研の初代庁舎（P.10、図11）は、明治35年（1902）に奈良県物産陳列所として設計された建物です。設計者は平城京研究や日本建築史において高名な関野貞博士^{こうみょう せきの ただし}です（P.22、図8）。この建物は、現在でも奈良国立博物館の仏教美術センターとして使われています。春日野の地^{かすがの}に発^{はっ}足^{そく}した奈文研ですが、当初は発掘調査をするための組織はありませんでした。ところが、平城宮跡の発掘調査をおこなうことになりまして、発掘調査部が加わりました。土の中に埋まっ^{まい}てい^{ぞう}る文化財のことを「埋蔵文化財^{まいざうぶんかざい}」と呼びます。奈文研は平城宮跡をフィールドにしたおかげで、埋蔵文化財を研究する国内屈指の研究機関として、その後大きく発展をしていくことになります。

1. 奈文研による発掘調査概説

記念すべき平城宮の第1次調査から5年後の昭和35年（1960）には、平城宮跡内の奈良市^{さきひがしまち}佐紀東町というところに発掘調査の事務所を構え、年間を通じた発掘調査に着手をします。それ以後62年間の長きに渡り、特別史跡平城宮跡の発掘調査を進めてきました。その進め方はおおむね6期に分けることができると思います。時代のニーズに応じて、調査の内容や目的などに変化が生じたためですが、その詳細を段階ごとにお話ししましょう。

①黎明期^{れいめい}（1955～1963年頃）

昭和30年（1955）から昭和38年（1963）頃までは、発掘調査の黎明期ともいえるでしょう（図3 橙色）。この時期は、道路より北側の官衙域と大極殿や内裏など東側の中枢部分の発掘調査が中心です。しかも1回の調査面積も3,000㎡を超えるような大規模な発掘調査が主体的でした。ちなみに第1次調査の場所は第二次大極殿院の東南隅にあたります（図3 赤字）。

なぜ、この場所を第1次として調査したかということ、大正13年（1924）の保存工事の際に石

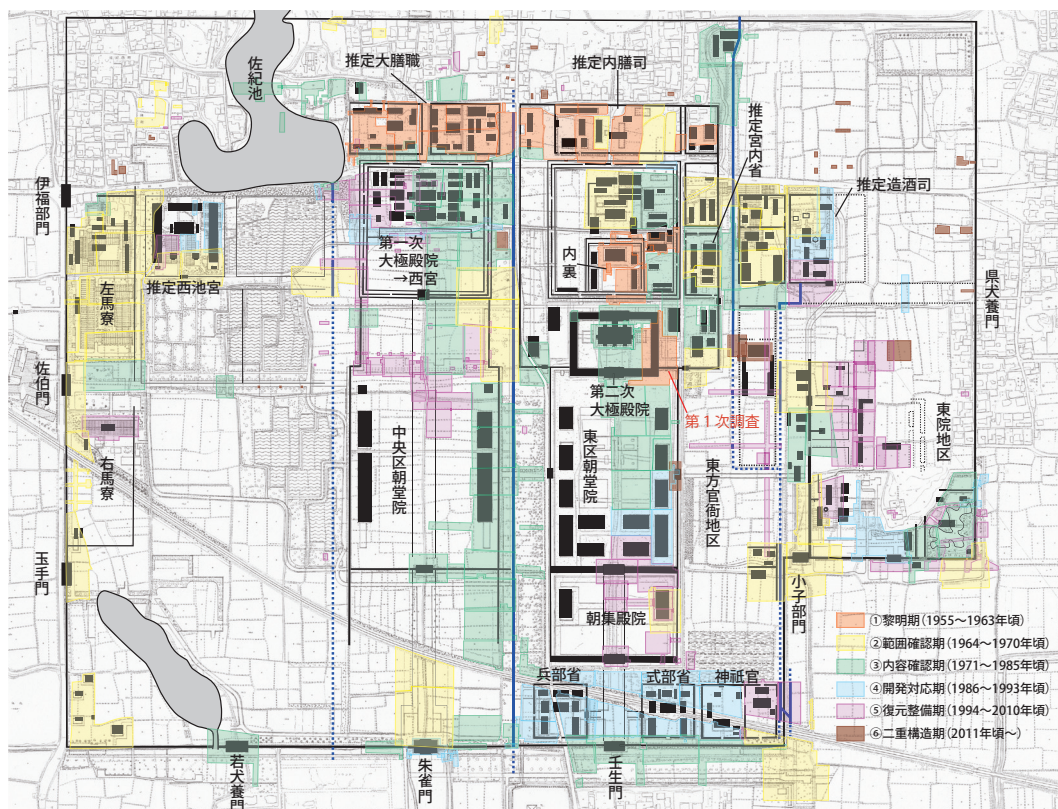


図3 奈文研による平城宮跡の既発掘区

敷きの一部が見つかったいたため、ここから発掘調査を始めようということになったそうです。図4が第1次調査の写真です。麦わら帽子なんかは今も昔も変わらないとか、作業服はずいぶん変化しているとか、真夏におこなわれた当時の発掘調査の様子が伝わってきます。

第2次調査以降は、先ほどの一条通り沿いの調査で見つかりました建物群の解明を目指していくことになりました。第一次大極殿の北側で、現在は^{だいぜんしき}大膳職や^{ないぜんし}内膳司など、天皇や役人の食膳を用意するような場所と想定されている官衙域にあたります。

そして、昭和35年(1960)の第5次調査(図5)において、ついに第1号となる木簡が出土しました(図6)。この木簡はS K 219と呼ぶごみ捨て穴に捨てられていたもので、「竹波命婦」という女性の名前が書かれていました(図6右)。この女性は^{こうけんてんのう}孝謙天皇のお気に入りの側近です。^{ほつげし}法華寺にいた^{ちくぼのみようぶ}竹波命婦が、調味料を届けるよう平城宮の役人に伝える内容でした。このことか



図4 奈文研による平城宮第1次調査(1955年)

ら、この場所に宮内での役人の食事などを作った大膳職という役所が置かれていたと推定されました

第 1 号木簡の発見により、平城宮跡の地下には、文字で書かれた資料が眠っていることが明らかになりました。現代まで伝わった古代の文字資料は限りがあり、あまり増加することは考えにくいですが、遺跡の中に残る文字資料はこれからも見つかるでしょうし、日本の古代史研究に無限の可能性を与えるものでした。この出土文字資料の発見は、平城宮という遺跡の価値を大いに高めたといえます。ちなみに、この時期に平城宮から出土した木簡を含む 3184 点が平成 29 年 (2017) には国宝に指定されました。

昭和 38 年 (1963) の第 13 次調査では、^{だいたいもりどころ}「内裏盛所」と書かれた墨書土器が出土し (図 6 左)、大膳職の東隣は、天皇の食膳を用意するような内膳司があったのではないかなど新しい発見が相次ぎました。そもそも、平城宮の中の宮殿や役

所の配置図は古文書や古絵図に残っていませんので、こういった出土文字資料や遺構を手がかりに、パズルのように平城宮の中核部の様相を推定するための調査が重ねられていきました。

②範囲確認期 (1964～1970 年頃)

昭和 39 年 (1964)～昭和 45 年 (1970) 頃までは、平城宮のはしっこ部分を調査しているなど見てとっていただけたと思います (図 3 黄色)。この時期は、^{おおがき}大垣と呼ぶ平城宮を取り囲む区画施設や門の位置を確認するための発掘調査が中心におこなわれました。そのきっかけとなったのは、東院地区の発見です。

図 7 は昭和 39 年 (1964) に平城宮跡の将来像として描かれた図面です。平城宮は正方形に近いかたちに描かれています。平城宮のすぐ東には、東一坊大路が通ると推定されていました (図 7 緑破線)。^{おおじ}だいたい条坊道路の大路には恒常的な建物などはありませんから、遺構密度が薄いのが一般的です。そこで、古代の大路と重複させるように、現在の国道 24 号線を通す計画が持ち上がりました。そして、道路建設に先立つ発掘調査がおこなわれました。ところが、^{ひがしいちぼうおおじ}想定された位置に東一坊大路がないということがわかりました。つまり、平城宮が東に張り出し部分 (現在の東院地区) をもつことが明らかになったわけです (図 7 赤破線)。

このときの新聞報道を見てみますと、当時の混乱ぶりがよく分かります。新聞紙面には「正方



図5 平城宮第1号木簡が出土した第5次調査 (1960 年)

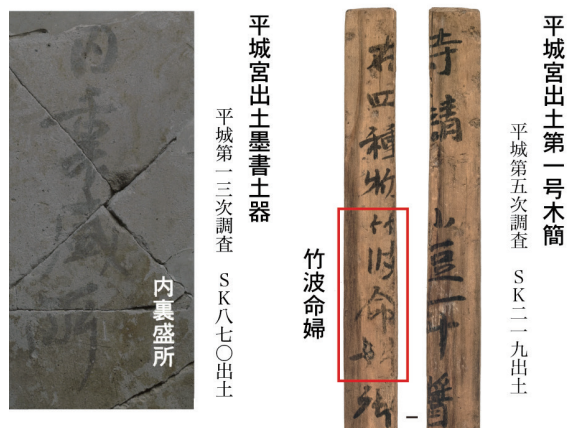


図6 平城宮の調査で出土した出土文字資料

形でなかった」とか「問われる現代の叡智^{えいち}」などというふうな文字がみえまして、道路建設と遺構保存のはざまで世論が割れたり、大騒ぎになったりしていることがよく分かります。それだけ平城宮跡は人々の関心を集める遺跡だということもいえるでしょう。半年後の新聞紙面を見ると、国道 24 号線は、東院地区^{とういん}を迂回^{うかい}する路線（図 7 青破線）、すなわち現在の路線に変更する決定がなされたと伝えられています。半年で決まるというのは、とても

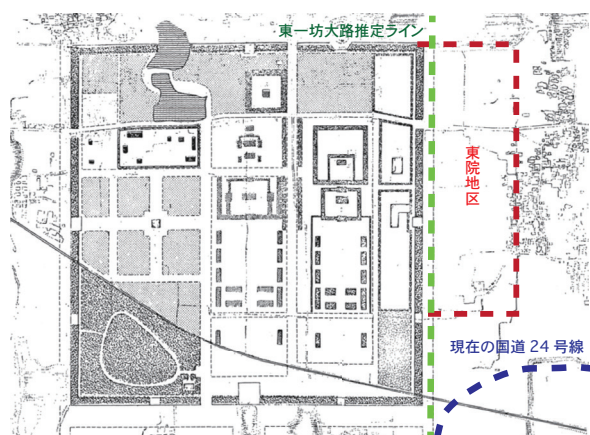


図 7 平城宮跡の将来像 奈良県都市計画課森一雄案（奈文研 2016）に加筆

スピード感を持って対応されたように思いますが、それでも新聞紙面には「遅すぎた路線決定」とか「万博までに間に合わぬ？」みたいな見出しが踊りました。なぜか？と言いますと、国道 24 号線の開通は、昭和 45 年（1970）の大阪万博を目指していたためだそうです。いずれにせよ、この時も平城宮跡は市民のみなさまの力添えで、保存されることになったわけです。

③内容確認期（1971～1985 年頃）

昭和 46 年（1971）から昭和 60 年（1985）にかけては、第一次大極殿院、中央区朝堂院、第二次大極殿院、東区朝堂院などの平城宮の中でも中枢部分の発掘調査が精力的に進められました（図 3 緑色）。

図 3 の緑色に塗った調査区を、よくご覧になっていただきますと、東半分を発掘調査していますよね。平城宮の中にはさまざまな役所が置かれていましたが、その中心となる建物は東西棟であることが一般的で、全体の建物配置なども基本的には中軸線から東西対称に配置されていました。そこで平城宮の発掘は、東半分を発掘して、西半分は未来に残すという基本方針の下に、各区画の東半分について調査を進めていきました。その結果、平城宮は 2 つの大極殿^{たいごくでん}と 2 つの朝堂院^{ちやうどういん}を持つ特異な構造であるなど、中枢部の様相が明らかにされました。

平城宮の第一次大極殿の建物は恭仁京^{くきにきやう}に移築されます。平城宮に戻ってくるときに、第一次大極殿が同じ場所に戻されるわけではなく、場所が移されました（第二次大極殿）。そして、かつて大極殿が置かれた場所には、称徳天皇^{しょうとくてんのう}の西宮^{にしみや}という宮殿に造られたことが分かっています。ですから、大極殿は同時並存するわけではないので、西側を第一次、東側を第二次と呼んでおります。それに対して、朝堂院は 2 つが同時並存していましたから、西側を中央区朝堂院、東側を東区朝堂院と呼んでいます。

この時期におこなった発掘調査に基づいて、平城宮跡の長期的な保存整備の計画が検討されました（図 8）。昭和 53 年（1978）には、有識者や奈文研などがまとめた保存整備の基本構想資料が作成され、このようなゾーニングで平城宮跡はこれから整備をしていくのだという方針が出されました。

平城宮跡指定 100 年の公式キャラクター、キュート組【宮都組】”ツゲじい”（図 9）をご存

知ですか？このツゲじい、実はこの時期におこなわれた平城宮跡整備の^{こうろうしゃ}功労者なのです。平城宮跡の発掘調査では、たくさんの柱穴が見つかりました。この柱跡の位置にツゲの木を植えて、円柱状に刈り込んで柱を表現する整備手法が取られました（図 10）。しかし、このときに整備されたツゲは、今ではちょっと年老いてきて元気のないものもあって、刈り込みが甘くてちょっとメタボ気味になっているものもありまして、まさに「ツゲじい」といった感じです。

また、推定宮内省の部分では、^{すいていくないしょう}檜皮葺の建物が復元されました（図 11）。しかし、現在ではやや老朽化が進み、こういった復元建物は歴史教育の場などに積極的に活用して、定期的にメンテナンスしていかないと、維持管理が難しい面があるなどというのが実感です。

④開発対応期（1986～1993年頃）

昭和 61 年（1986）から平成 5 年（1993）は、いわゆるバブル経済の時期に当たります。この時期は開発対応期としましたが、実は平城宮跡内の発掘調査は、それほど多くはありませんでした（図 3 水色）。それでは、この時期、奈文研はどこを調査していたのかというと、平城京内の大規模な開発に伴う発掘調査に協力していました。バブル期ですから、平城京内での大規模な開発が多くありました。例えば、^{ながやおう}長屋王や^{ふじわらのまろ}藤原麻呂の邸宅が見つかった左京三条二坊・二条二坊や西市付近と推定されている右京八条一坊などです。こういった平城京内の遺跡は経済活動とのかねあい、遺跡が保存できない場合も多いですから、保存がかなわない遺跡の方を優先的に調査せざるをえなかった時期ともいえます。

とはいえ、平城宮跡内も全く発掘調査ができなかったわけではありません。図 3 の水色をみま

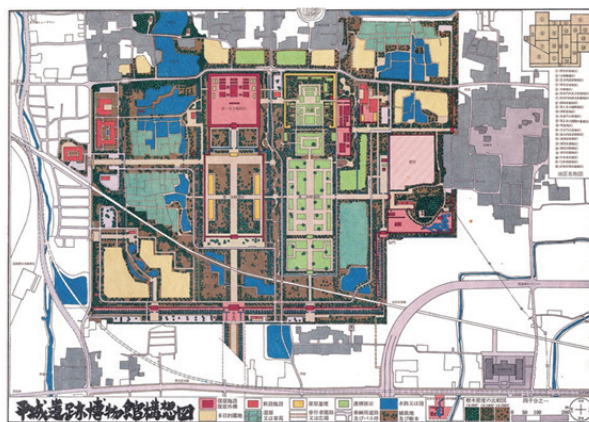


図 8 平城宮跡保存整備基本構想資料（奈文研 2016）

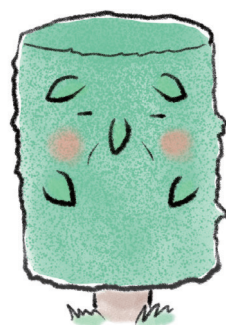


図 9 キュートぐみのツゲじい



図 10 内裏地区のツゲによる遺構表示（1986 年）



図 11 推定宮内省地区の復元建物（1998 年）



図 12 なら・シルクロード博覧会の平城宮跡会場 (1988 年)



図 13 整備された兵部省・式部省地区 (1988 年)

すと、東区朝堂院の南側で、近鉄線の線路に沿って水色に塗られた部分の発掘調査が進められました。なぜ、この場所かといいますと、平城宮跡がなら・シルクロード博覧会の会場に選ばれたからです。この博覧会は昭和 63 年 (1988) に奈良公園をメイン会場に開かれ、サテライト会場として、平城宮跡会場が設置されました。このように近鉄線に陸橋を渡すような仮整備をされて (図 12)、また来場者には発掘現場をみていただくという画期的な平城宮跡の活用、公開、普及をおこないました。

この会場設置に先立つ発掘調査で、この場所には兵部省と式部省がみつかりました。兵部省は武官の勤務評定などを行う役所、式部省というのは文官の勤務評定などを行う役所です。二つの官衙は、規模も建物配置も良く似ており、双子の官衙とも呼ばれています。ここでは柱や壁を何十センチか立ち上げるとい、一味違う整備の手法が採られております (図 13)。近鉄電車奈良線の車窓からもみえる場所ですから、ぜひ探してみてください。

⑤復元整備期 (1994 ～ 2010 年頃)

平成 6 年 (1994) から平成 22 年 (2010) には、いよいよ朱雀門や東院庭園あるいは第一次大極殿などの実物大の建物や庭園を復元する事業が本格化しました。そのための追加の発掘調査におわれることとなりました。

図 3 は奈良時代後半の平城宮の配置図を下図に使っていますから、第一次大極殿院部分は、南面を縮めて西宮という宮殿に建て替えられています。下図を奈良時代前半の下図にしてみますと (図 14)、この時期の調査 (赤) は、大極殿院の回廊に沿って発掘調査していることが分かるかと思えます。

さきほど、平城宮の発掘調査は、東半分のみを発掘して、西半分は保存するという方針が進められたと言いましたが、この第一次大極殿院に関しては、東半分の折り返しでは理解のできない部分が出てきました。具体的には西面の回廊が歪んでいるからなのですが、遺構を保護したうえで復原建物をつくるためには、その原因や歪み方などを確

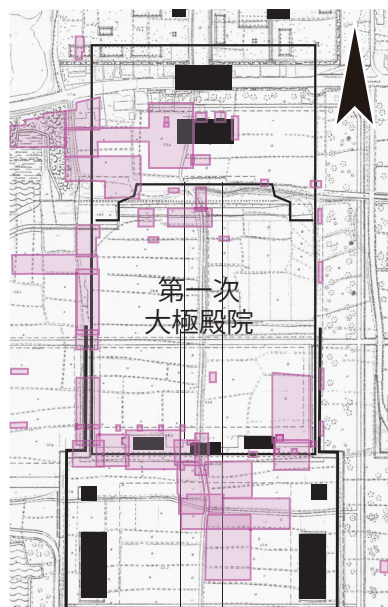


図 14 第一次大極殿院回廊の調査

認する必要がありました。発掘調査の結果、その歪みの原因が明らかになりました。平城宮がある場所は、もともと、谷あり山あり古墳ありといった場所だったのですが、それを平らに削ったり埋め立てたりして、平城宮が作られました。第一次大極殿院の西面回廊のあたりは、谷を埋めて造られていることがわかりました。その谷の埋立て土が、1300 年の間に沈下したため、西側の回廊部分は北に行くほどずれてしまったとみられます。

⑥二重構造期（2011 年頃～）

平成 23 年（2011）以降、東院地区や東方官衙地区（図 3 茶色）を中心に、学術調査を進めてきました。その一方で、整備に関わる小面積の確認調査も多くこなしてきました。これは整備によって遺跡を傷付けることがないように、事前に遺構の有無やその高さなどのデータを確認することが目的です。学術調査と確認調査の二重構造というわけです。

しかし、学術調査はそれまでのように大規模な調査が難しくなってきたのが現状です。掘れば掘るだけ遺物も出ますし、それらの整理、研究、報告書の作成がなかなか追いつきません。収蔵庫もいっぱいになってくるとい問題も出てきました。一方で、整理、研究はより細密化し、緻密な調査が求められるようになってきました。遺跡から引きだせる情報が多くなったことで、土壌サンプルを採取したり、土ごと研究室に持って帰って、水洗しながら“篩がけ”したりするケースも増加しました。このため、学術調査の面積は必要最小限の面積で、最大限の成果を追究する方向を目指すようになってきました。その潮流は今後もますます強くなることでしょう。

おわりに

現在、これまで平城宮跡は全体の 4 割弱の発掘調査をおこなってきました。どんな役所があって、どんな場所だったのか、分かっているところもありますが、なかなか分かっていない区域もあります。これからの平城宮跡の発掘調査は、どうあるべきなのでしょう？私の考えを少しお話しして、発表を終わりたいと思います。

科学技術は日進月歩でありまして、広い面積を発掘して、たくさん遺物を持って帰って…というやり方ではなく、例えば、地中探査や航空レーザーなどを使ったり、地質学や測量学など他分野の技術を応用したり、小さい面積で、かつ最大限の成果が上がるような発掘調査のやり方というのを、私たちは考え、試していかなければならないのではないかと考えています。

例えば、埋蔵文化財センターの協力によって SfM という三次元計測の技術を応用し、遺跡の三次元モデルを作るとか、ICT 技術を活用して遺跡を記録することで、展示や整備に活かせるますよね？さまざまな分野の研究者が集まって、協力して研究するというのが奈文研の一番の強みであると思いますので、こういった発掘調査をめぐるさまざまな技術開発に、今後も取り組んでいきたいと思っています。これからも、どうぞ平城宮跡ともども、平城宮跡をめぐる奈文研のさまざまな研究活動に、ご支援をいただければ幸いです。ご清聴ありがとうございました。

引用文献

奈文研『のこった奇跡のこした軌跡—未来につなぐ平城宮跡—』 奈良文化財研究所 70 周年・平城宮跡史跡指定 100 周年記念特別展展示図録、2022 年
奈文研『平城宮跡整備報告書』、2016 年